

「人生を変えた一冊」

「チーズケーキ」設計

安田幸一先生



今回は、東工大附属図書館の設計者である安田幸一先生に、「人生を変えた一冊」というテーマでインタビューさせていただきました。安田先生が選んだ本は、磯崎新著の『建築の解体』です。この本によって安田先生の人生がどのように変わったかを語っていただきます。

——この本に出会ったきっかけは何ですか？



学部二年生の春に建築学科（現建築学系）に入ってから1年間は、建築の様々な分野の先生方から基礎的な講義を受けました。三年生になって、さて将来、自分は設計者（建築家）になりたいのか、構造や環境のエンジニアになりたいのか、それなりに迷ったのですね。後から考えると、構造の成績があまりにも低かったので構造の分野には行きたいと思っても行けませんでしたけど（笑）。学生時代、考えに迷った時は大学の図書館や神保町の古本屋に行って、手に取った

本とか雑誌をパラパラ読むことによって情報を得ていました。現代のように個人のコンピューターなど存在しなかった時代ですので、印刷物や直接人の口からしか情報を得られなかったわけです。ネット検索とは全く違って、一つ一つの情報を「足と手で探す」作業でしたので、偶然に出会った情報は大変貴重なものでした。

1975年当時の建築雑誌に頻繁に登場していた新進気鋭の建築家が磯崎新でした。磯崎が設計した建築は、見た目にもアグレッシブで刺激的、何か新しい時代の到来を予感させるような魅力に溢れていました。こういう建築を設計する人が、どのような考えを持っているのかに興味があって、彼の著作を探したのです。ちょうどその頃新刊として出版されたのが『建築の解体』です。本屋で箱入りの品のいい布張りの装丁の学生にとっては豪華本を手にとって見ていて、「解体」というタイトルにまず惹きつけられました。解体ってどういうことだろう？建築はそもそも「造る」ほうではないのか？と（笑）。箱の表紙は原爆の跡地のように、この荒涼とした原野に彼がデザインした建築をモンタージュしているわけです。余白のところに聞いたこともない外国の建築家の名前が列記されていました。本のページをめくって読んでみるとさらに全くわからない単語だらけでした。しかし、脳ミソが刺激されるような感覚があって、これを買って読まないといけないと直感で思ったわけです。それにしても当時4,900円の本は学生にとって、大変高価なものでした。必死に働いて稼いだアルバイト代が月1～2万でしたので。

——この本の魅力を聞かせてください。

『建築の解体』は、磯崎氏が欧米で活躍する同世代建築家の建築理論を紹介するものでした。日本ではまだ使用されていない英語の語句を漢字で表現できなかったのでカタカナの羅列で表記してあったので、なんのことだか全くわからないわけです。今日ではここで使用されていた単語はすでに一般名称になっています。図版や挿絵、写真も刺激的でした。オーストリアのハンス・ホラインという建築家の紹介ページでは、荒野にプラグが刺してあったり、砂漠に棺桶が置いてあったり、ドイツ・ナチスの高射砲の写真が出現していたり…かなりびっくりしたのです。これは一体なんなのだろう？と。彼が設計したウィーンのレッティーという蠟燭店があるんです。このファサードを見たとき、その後の私の建築観を決定したと言っても過言ではないくらいショッキングな出来事でした。ウィーンのシンボルで、ゴシック様式のシュテファン大聖堂が建っている広場に面した小さなショップです。装飾的な様式建築が建ち並ぶ街並みに、突如アルミの幾何学的なショップファサードが挿入されている姿が衝撃でした。建築の表現手段として、「線を消すこと」「最小限の素材で創り上げること」などはその時の感動が今まで頭の片隅に残っているからだと思ひ返ってみて思います。その後、10年くらい経ってから本物を実際に訪れたとき、その感動は間違っていないことを確認しました。



その他のジェームズ・スターリングやロバート・ヴンチューリ、アーキグラムなどにも大きな刺激をもらいました。正直に言えば、当時、普通の建築のこともまだ分かっておらず、何に自分が惹かれているかを認識しないまま読み進めていました。まあいつかはわかるだろうというある意味いい加減な読み方でもありました。しかし、読む毎にいろんな新しいことが書いてあるから、わからない単語が出てきた度に下線を引いて、他の図書館の本で調べたメモを本の隙間に書いていきました。結局、この本を読むのに3～4週間かかりましたね。

この本には、自分が習ってきた建築史からすると関係のないことがたくさん書かれていたのです。自分たちが学内の授業で習ってきたのとは全く異なる建築の説明がここにあるのが魅力でした。何かすごくソワソワする感覚です。「今、我々の周りで起こっている現象はなんなのだろう」と。読んでいる内容全てが新しかったわけですね。文章を1、2行読むと、1、2個わからない言葉が出て来る。また4、5行目でわかんない単語が出てくる。わかんないことだらけでなかなか前に進まないわけです。だけど読み進めて行くと、わからない単語が3行で1つあり、それが5行に1つになり、10行になって行って、段々内容がわかるようになっていく。そのスピードがどんどん早くなっていくのです。そういう意味でも、この本で得られた語彙検索が相当、学生のスターティングポイントとしては役に立ったと思います。読み終えて、建築家になって自分の知らない世界の建築をもっと知りたいと思ったのと同時に、建築には国際的な感覚が大切であることを認識し、将来外国で学ぶことに憧れるようになりました。実際、その8年後には米国へ留学することになります。

——本日はありがとうございました。最後にこの記事を読んでいる人に一言お願いします。

本というのはきっかけであって、行動を起こす刺激剤だと思っています。本に書いてあることを押し広げて、好奇心を持って、自分の探究心をどんどん掘り下げていくべきものではないかと。本との出会いは、人との出会いとも似ています。人と出会って、付き合いがどんどん広がってくる。学生時代は分野に関係なく直感的に読んだ方がいいと思いますよ。私だってこの本を人に勧められて読んだわけではないのです。単純にこの魅力的なタイトルと表紙に惹かれて、開けた瞬間に「かっこいい」、それだけです、最初の出会いは。でも手に取らなかったら、それ以降の行動に繋がっていないわけですよ。是非、良い人と出会うくらい、良い本とたくさん出会って欲しいなと思います。



場所:

東京工業大学 緑が丘1号館3階320

安田幸一研究室

インタビュアー:

安西 渉 (情報理工学院情報工学系学士課程3年 図書館サポーター)

谷本 光大 (第6類学士課程1年 図書館サポーター)

写真:

伊藤 有哉 (第3類学士課程1年 写真研究部)